

保 育

「やってみる楽しさ」を実感するための環境・援助の検討

—3歳児における「もの」とのかかわりに焦点を当てて—

君 岡 智 央

1 はじめに

本研究の目的は、3歳児が園生活の中で出会う「もの」（植物、飼育物、自然物、素材、道具など）に対し、思い切っにかかわっていこうとすることを通して「やってみる楽しさ」を実感できるようになるには、教師がどのような環境構成や援助を行うべきなのかを検討することである。

幼稚園教育要領の「環境」の目標において、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」¹⁾として、子どもが周囲の様々な環境にかかわり、生活に取り入れていこうとする力を養うことが示されている。「周囲の様々な環境」には、子どもたちの好奇心を抱かせるような植物、飼育物、自然物、素材、道具などといった「もの」も含まれている。こうした「もの」と出会った時の3歳児の子どもたちの様子に着目すると、“なんだろう？”“面白そう”“やってみたいな”などといった思いを抱き、興味をもつ。しかし、“自分にもできるかな？”“さわっても大丈夫かな？”などといったように不安を抱いたり戸惑ったりして、やってみることをためらう様子が見られる。

国立教育政策研究所(2005)は、「幼児は、これまでに見たり触れたりしたことのないものと出会うと、興味をもってかかわる。(中略)ものとの出会いを通して、幼児は、発見したり考えたりイメージをふくらませたりして、様々なことを学び、自らの世界を広げていくのである」²⁾と子どもが「もの」と出会い、かかわることの必要性について述べている。これは、どの年齢の子どもたちにも通ずることと捉えている。このように「もの」

と出会い、自分なりにかかわっていく中で発見がある、考えるきっかけが生まれる、イメージが膨らむ、これらのことがあるからこそ“やってみることが楽しい！”という実感が生まれてくのだと考える。そして、次第に、子どもたちが発見したこと、考えたこと、イメージしたことを自分たちの遊びや生活に取り入れていこうとするようになるのだと考える。そうした場合、本園の3歳児の子どもたちの実態からすると、園生活の中で「もの」と出会った時、不安や戸惑うことがあってもそれを乗り越えてかかわっていこうとし、「やってみる楽しさ」を実感する経験をしていくことが必要となってくるのではないだろうか。そのため環境構成と教師の援助を検討することは意義のあることと思われる。

3歳児が「もの」とかかわる中で「やってみる楽しさ」を実感している姿とは、様々な「もの」との出会いを通して興味が湧いた時、思い切って試してみようとする事であると考えている。そして、試してみた時に五感を働かせて感じていたり、思いが実現できたことを喜んだりしている姿であると考えている。

2 研究の方法

(1) 対象

年少組3歳児 (男児15名 女児13名)

(2) 検討の方法

3歳児のクラスにて、教師自身が日常的に収集しているエピソード記録の中で子どもたちが「もの」と出会い、かかわっていくまでの過程や「もの」とかかわりながら自分なりに試している時の

様子を記したものを実践事例として書き起こした。この実践事例を用いながら、本園で実施している教師7名を対象にした保育カンファレンスと3歳児のクラス担任自身による事例の考察により、教師が行った環境構成や援助について適切であったかどうかを検討した。

3 実践事例

事例1「カブトムシとのふれあい」（6月～7月）

<背景>

4月にクラスの子どもが家庭からカブトムシの幼虫を持ってきた。6月には成虫になったため、子どもたちが観察できるように朝から部屋の入り口からすぐ見えるところに飼育箱を置いておいた。早速、子どもたちが園に来ると“なんだろう？”と飼育箱に集まってきた。

「かぶとむしってかわいいね」

保育室に入ってきたA男が「わっ！カブトムシ！」と声を上げる。続いてB男も「本当じゃ。カブトムシ！」と言いながらカブトムシを見て驚いている。「何でおるん？」「先生が連れてきたん？」などと教師と会話をしながらカブトムシの様子を観察している。するとC男が「先生、（カブトムシを）持ってみて」と言う。教師が「ああ、いいよ。ほら。」と細い角の方を持ってみせる。子どもたちが「キャー」と叫びながら逃げ回る。「大丈夫だって！何で逃げるん？もしかして怖いん？」と教師が尋ねる。子どもたちが頷く。「角のところをやさしく持ってやると怒らんよ」と教師が伝える。C男が「持ってみたい！」と言うので持てるようにすると「やっぱりやめた」と持つことをやめる。トレイにカブトムシを移し、「こうやって背中を“よしよし”してやってもカブトムシは喜ぶんよ」と教師が背中をさすってみせる。子どもたちが「本当じゃ」と言いながら納得した様子。C男が自分から背中を恐る恐る触ってみる。「先生、

（カブトムシが）何にもせんかった。カブトムシってかわいいね」と言いながら喜んでいる。C男が再度、触る。この時にはすでに恐怖感はなく、落ち着いて触っている。A男も触ってみる。「あっ、ツルツルしとる」とA男が背中を触った感触を話す。教師が「えっ？本当？」と言いながらカブトムシの背中を触ってみる。「確かにツルツルしとる！」と感想を子どもたちに伝える。次第に触ってみたいという子どもたちが増え、背中を“よしよし”しながらやさしくさすっていた。

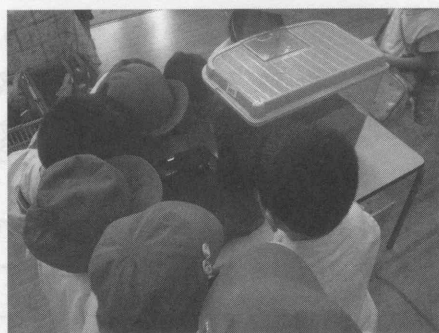


図1 カブトムシの動きを見る子どもたち



図2 背中を触ってみる様子

【考察】

事例の内容や図1の様子から子どもたちがカブトムシに対する興味をもっていることがわかる。その中でC男は自分でカブトムシを持ってみたいという思いがあったと推察する。それは、C男が教師に「先生、（カブトムシを）持ってみて」と教師に伝えてきたことや自ら「もってみたい！」と言ってきたところからわかる。しかし、持ってみるとカブトムシがどうなるのか、何をするのか、子どもたちの中では想像がつかないため“怖い”

という不安が生まれるのだと考える。そこで、子どもたちがカブトムシに安心して直接かかわれるように、教師が持ってみせたり触ってみせたりした。これによって触っても大丈夫だということがわかり、子どもたちも安心して触ることができた。そして、触ってみることで、「カブトムシってかわいいね」からわかるように、カブトムシへの親しみが湧いたり、背中がツルツルしていることを指で触れて感じたりすることができた。

事例2「泥だんごを作ってみよう」（6月～7月）

<背景>

保育室を出て園庭と廊下の境で立ち尽くしているD女。病気による休み明けで不安もあって、なかなか園庭に飛び出していけない。教師が手を出し「先生と一緒に外のいろんなところを見に行こう」と声をかけた。D女が軽く頷くと教師と手をつなぎ、一緒に園庭めぐりを始めた。

「泥だんご、持って帰りたい」

D女と教師が園庭めぐりをしているとE女やF女が泥だんごを作っている。教師が「何作ってんの？」と声をかけてみる。E女とF女が「泥だんご！」と返す。作る途中のもの（ある程度丸くなっているもの）を見せてくれたので「へえ～、上手に作ってるじゃん」と返し、D女に「D女ちゃんもE女ちゃんやF女ちゃんと一緒に作ってみるか？」と聞いてみる。D女は“ううん”と首を横に振る。

「じゃあ、先生と一緒に作ってみるか？」と再度、聞いてみるとD女が“うん”と小さく頷く。早速、教師が土に水をかけ、泥を作る。丸め方など、教師がやってみせながら教えていく。教師がD女に「泥だんご、作ったことあるん？」と尋ねてみる。“ない”と首を横に振るD女。「そっかあ。初めてやってみて、できたらすごいじゃん」と返す。するとD女が手に力を入れ一生懸命、丸めようとする。まだ、泥がやわらかいので、指と指の間から泥がはみ出ているので「もう少し、やさしく

丸めてもいいよ」と伝える。サラサラとした砂をかけながら、徐々に丸い形に仕上がっていく。D女も“ほら”と仕上がりがつつある泥だんごを教師に見せる。「上手にできたじゃん」と認めるとD女の硬かった表情が和らぐ。片付けの時、出来上がったD女の泥だんごを教師が「袋に入れてみんなが見えるところに飾っておいてあげるよ」と話す。D女が快諾したので、下駄箱の上の泥だんご置き場の最前列に置く。D女が自分が作った泥だんごをじっと眺めている。

降園後のこと。D女とD女のお母さんが自転車で幼稚園に戻ってくる。D女が自転車から降りて教師のところに来るので「どうしたん？」と尋ねてみる。自分の思いをなかなか言い出せないようである。「言えるまで待ってあげるよ」と答えるとD女が「泥だんご、持って帰りたい」と話す。「そっか、そっか。上手にできたけえ、飾っておいてあげようかと思ったけど、持って帰りたいんか。もちろん、持って帰り」と袋に入った泥だんごをD女に手渡す。D女が嬉しそうにお母さんに見せている。教師が「そうか。お母さんに見せたかったんか」と言うとお母さんが、「そうなんです。どうしても私に見せたいって」と返す。D女は、自転車に乗っても笑顔であった。

【考察】

D女の病気による休み明けの不安を解消するため、D女に自分のやりたいことが見つかるようにしていくことが必要ではないかと考えた。そのため、子どもたちがよく遊んでいた泥だんご作りをきっかけにしてD女に“自分も作ってみよう”という気持ちになってほしいと思っていた。D女にとっては、泥だんご作りが初めてのため、友だちがしていることを見ながら作ることに大きな不安や戸惑いがあったのだろう。しかし、D女にとって気もちの拠り所となる教師と一緒に作ることで、不安や戸惑いを少し和らげることができたのでは

ないだろうか。更に作っていく中で「初めてやってみて、今日、できたらすごいじゃん」という言葉をかけたことがD女への刺激となり、自分の泥だんごを作りたいという意欲につながったのではないだろうか。それは教師が言葉をかけた後、D女が手に力を入れ、一生懸命丸め始めた姿からわかる。

泥だんごが出来上がったなら、それで終わりではなく、泥だんごができた嬉しさに応え、思いが実現できたことに喜びが感じられるようにすることも大切になってくると考える。作れたことを認めること、作った泥だんごをよく見える場所に飾ったこと、持ち帰られるようにしたこと、D女にとってはそれがきっかけとなって「やってみる楽しさ」や「やってみよう！」という意欲になっていくと考える。数日後、D女は自ら友だちの輪の中に入り、泥だんご作りを楽しんでいた。

事例3「石けん泡を作ろう」（9月～10月）

<背景>

夏休み明け、3歳児の子どもたち数名が5歳児の石けん泡遊びの様子を見ていた。3歳児の子どもたちも遊びの輪の中に入れてもらい、5歳児の子どもたちに作り方を教えてもらいながら石けん泡を作り始めた。作った石けん泡はペットボトルに入れられ、嬉しそうに持っている。それを見た周りの友だちが「いいな・・・」「作りたい!」とつぶやいたり、教師に伝えたりしてきた。そこで、大小のボウル、泡立て器、いろいろな色のお花紙、石けん、おろしがねなどの道具や材料を用意し、テーブルを一行に並べて石けん泡を作って遊べる環境を整えた。

①「見て!!できた!」

石けん泡づくりをするテーブルの周りでは、たくさん子どもたちで賑わっている。その近くでG男がボウルや泡だて器をもって立っている。初めて石けん泡作りをしようとするG男を見つけた教師は、「G男君、おいで。やろうや」と声をかける。少し時間がたっ

ても立ち尽くしたままだったので、「おいで。おいで」と呼ぶが、なかなかテーブルのところに近づいて来ない。教師が他の子どもにかかわっている間に、G男はどこかに行ってしまう。

翌日、一人で木の家にいるG男に教師が、「泡、先生と一緒に作ってみないか?」と声をかける。少したってG男が頷く。教師と一緒に道具を準備し、一緒に作る。一つひとつやり方を伝えていくと、ぎこちない道具の持ち方だが、一生懸命かき混ぜている。G男の目の前や左右斜め前でかき混ぜている子どもたちが泡立て器の柄を両手で合わせ、火おこしをするかのようにかき混ぜ始める。G男がその混ぜ方を少しの間、見ている。教師がさりげなく「3人が面白い混ぜ方をしてるなあ」と一人、感心しながらつぶやく。すると、G男も真似をして同じようにやってみる。泡がどんどんできていく。その混ぜ方が気に入ったのか、G男がひたすらかき混ぜている。「G男君、上手に泡ができているね!」と声をかけると「先生、見て!!できた!」と誇らしげに泡を見せるG男。「自分でよくやったよな。できてよかったね」とG男が作った色水を見ながら、教師が声をかける。こぼれないように袋に移し、口をくくると、G男はその場に座ってビニール袋の中の石けん泡をじっと見たり、袋越しに揉んだりしている。

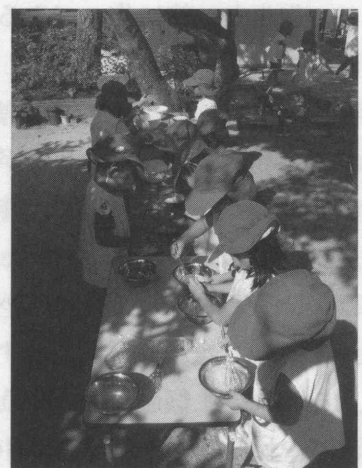


図3 石けん泡作りの様子

【考察】

立ち尽くしているG男を見た教師は、G男が初めて石けん泡を作ることに不安があり、そのため、石けん泡遊びのコーナーの手前で立ち尽くしていたのではないかと推察した。しかし、ここは教師の推察だけではなく、立ち尽くしている時に、なぜG男は立ち尽くしてしまっているのかを理解することが必要になってくると考える。そうすると教師が「おいでおいで」と呼ぶのではなく、まずは「どうしたの？」と尋ねたり、G男の表情などをよく見たりするという援助になってくると考える。どんなことに不安を感じているのかを理解しないままにいたため、G男は立ち去っていったのではないだろうか。G男の本当の気持ちを理解したうえで「先生と一緒にやろう」と声をかけたり、隣で遊び方を教えたりしてG男が安心感をもって遊べるような援助をすることが大切になってくるだろう。

そして、翌日の教師のかかわりも、この時にG男が本当に石けん泡を作りたいと思っているかどうかを理解したうえで誘っていくことが大切になってくると考える。結果としてこの事例では、G男が石けん泡を作って遊べたこと、泡ができたことを喜んでいるが、G男の中に“やりたい！”という気持ちがなかったら、「やってみる楽しさ」は実感できなかつただろう。

石けん泡づくりにおいては、友だちのしていることに自然な形でふれられるようにし、“自分もやってみたい”と思えるような場にしたいと考えていた。そのため、図3のようにテーブルを一列に並べ、たくさん的人数が固まって遊べるようにした。その結果、事例のように、子どもの視野に入りやすいG男の目の前と左右斜め前の友だちがしていることに自然な形でふれることができた。更に教師のつぶやきがG男の中で“やってみよう”という気持ちをもたせるきっかけとなり、G男自ら友だちのしていることを取り入れながら遊ぶことにつながった。

②「先生！やるの見よってよ！」

石けん泡遊びを楽しむH女とI女。I女が教師に、「先生、泡がピンクになるよ」と嬉しそうに石けん泡を見せる。石けん泡は赤に近いピンクになっている。教師は「ほんまじゃ。ピンクの紙は用意してなかったけど、どうやってできたん？」と驚く。I女が得意そうに「泡泡と赤を混ぜるけえよ！」と答える。「へえ～、泡と赤の紙を混ぜるとピンクになるのかあ。すごいなあ」と驚きながら返す。

教師とI女のやりとりをJ男がそばで三輪車に乗って聞いている。教師が「J男君も一緒にやるか？」と誘ってみる。「せん！（しない！）」と言って返す。「お母さんにお土産にしたら喜ぶかもね～」と話すJ男が「する！」と即答。そして、「先生！やるの見よってよ！」と言ってくるので「いるよ。見といてあげるけえ」と伝え、石けん泡を作るJ男の隣で様子を見守ることにする。J男が泡立て器、ボウルなど道具と石けんを持ち出して泡を作り始める。お花紙の色も赤、緑といろいろな種類を持って来てかき混ぜ始める。教師が「J男君、いろいろな色をいっぱい入れよるんじゃ。面白そうだね。」と話しかけてみる。かき混ぜながら、J男が「いろいろな色を混ぜたらどうなるんかなって」と答える。かき混ぜながら泡の様子を見るJ男が「緑が多すぎるんかな・・・」とつぶやく。その後もひたすらかき混ぜる。しばらくするとJ男の方から「先生！いろいろな色が混ざっていきよる」と驚いたように話しかける。見ると細かくなつたいろいろな色のお花紙が混ざり合っている。教師が「本当じゃ！赤、緑、青が泡と混ざり合ってるよ！」と驚く。これまで真剣な顔つきでかき混ぜていたJ男の顔が微笑む。更にJ男は泡立て器を泡につけ、泡を軽くたたいてみる。「ボテボテしとるじゃん。先生。ボテボテしとるけえ、やってみ」とJ男がやっていたことを同じようにやって

みるように教師に促す。教師がやってみる。「本当にボテボテしてる感じがする！面白いなあ」と返すとB男が「これ、クリーミーってことなんよ」とまた泡を軽く叩き始める。「なるほど。クリーミーってことかあ。ケーキのクリームのようにってことか」と教師が話す。J男が「そうそう」と答える。しばらくかき混ぜ続けた後、青のお花紙を入れて混ぜるとJ男が「あっ。水を入れてみよう」と水道のところに行き、泡の中に水を入れ始めた。テーブルのところに戻って、また、泡立て器でかき混ぜると「先生、クリーミーじゃなくなった」と話す。「何で？」と教師が尋ねてみる。「水、入れたけえよ」と答える。「へえー、水をいれるとクリーミーじゃなくなるんだ。面白いこと見つけたなあ」と驚きながら返す。J男は「うん」と言って頷き、自分で石けん泡をビニール袋に入れ、大切に持って帰ろうとしている。J男は30分以上この石けん泡遊びで遊んでいる。

【考察】

この頃のJ男は三輪車に乗ってよく遊んでいた。そして、三輪車に乗って石けん泡遊びのコーナーに来て、友だちが作っている様子をよく見ている姿も見られた。J男が石けん泡遊びに興味があることが窺えたため、J男を石けん泡遊びに誘ってみることにした。

J男は教師に見守られていることで、安心感をもって自分のやりたいように試している。同時に視覚、触覚を働かせて様々なことを感じ、驚いたり不思議に思ったりしている。ここでは、「J男君、いろいろな色をいっぱい入れよるんじゃ。面白そうだね。」と話しかけたことをきっかけに、J男が自分なりにやってみたこと、驚いたこと、不思議に思ったことを伝えてきている。隣で自分がやってみたこと、驚きや不思議に思ったことを受け入れ、共に驚く人がいることで、J男にとっては、「もっと聞いてもらいたい」という思いを抱いたのだろう。もっと聞いてもらいたいからこそ、

自分なりにいろいろとやってみるきっかけになっていくのではないかと考える。

J男が「いろいろな色を混ぜたらどうなるんかなって」と言っているように、たくさんの色を混ぜてみるとどういう色になるのかということを試している。この「いろいろな色を混ぜたらどうなるんかなって」という疑問が生まれるのは、お花紙の色の種類が多く用意してあったことが要因として挙げられる。また、そうした疑問が生まれることで、J男の中で“どうなるのか知りたい”という好奇心も生まれたと考える。この好奇心が試してみたいという意欲になり、実際に自分で試してみることで、お花紙の色が混ざり合うという視覚を通して感じる体験につながったと考える。

4 検討を終えて

3歳児の子どもたちは園生活の中で多くの「もの」と出会っていく。初めて出会う「もの」に対して興味、好奇心をもってかかわっていき、自分なりにいろいろと試していく時もある。これは、然るべき姿であると捉えている。しかし、そうした姿に対して教師がいかに関心を構成し、援助を行っていくかが重要になってくるのではないだろうか。

本研究の実践事例を通して3歳児の子どもたちが「もの」と出会い、思い切って試していこうとする中で「やってみる楽しさ」を実感するための環境構成や援助について検討した結果、次のことが考えられる。

①どんなことに不安を感じ、戸惑っているのかを理解していく教師のかかわり

子どもたちが「もの」とかかわる中で抱く不安や戸惑いの理由は様々である。事例3①で、教師はG男がどのようなことに不安を抱いていたかを理解しようとしていない。教師はまず、G男がどんなことに不安を抱いているのか、何に戸惑っているのかを理解すべきである。そうすることで、その時のG男の状況に応じたかかわり方ができると考える。理解しようとしなければ、G男の不安

や戸惑いを和らげることはできない。不安を抱いていると思われる子どもには、教師がまず「どうしたの？」などと尋ねたり、表情を見ていったりしていくことが必要となってくる。

②やってみることへの不安を和らげる教師のかかわり

子どもの不安を和らげる教師のかかわりとして次の3つの手立てが考えられる。

- ・教師が不安を和らげる言葉をかけながらやってみせる
- ・教師と一緒にやってみられるようにする
- ・子どもが思い切って試してみようとする姿を見守る

事例1、事例2、事例3①において、教師がカブトムシを触ってみせたり、泥だんごや石けん泡と一緒に作ってみられるようにしたりすることで、子どもたちは“このようにしていっていいんだ”という安心感をもつことができた。子どもの中に“どうしたらいいのかわからない”“どうなるのだろう”といった不安があるため、自ら「もの」にかかわりながら思い切って試していくことをためらわせてしまっているところがある。そういった不安を和らげるため教師がやってみせたり、一緒にやってみられるようにしたりする援助は必要な手立てであると考えられる。ただし、事例3①のように、教師の思いだけで無理にやらせようとするのではなく、子どもに“これがやりたい”“やってみたいな”という思いがあつての援助となる。

3歳児にとっては家庭を離れ、初めての園生活の中で心のよりどころとなるのは、教師である。事例3②では、その教師に見守られることで、J男は安心感をもって自分なりに考えたことを試していこうとしていた。このように、子どもが自分なりに考えたことを試していこうとする姿を教師が見守っていくことを通して、達成感や満足感が得られるようにすることが大切になってくると考える。

③「やってみよう！」という意欲が湧く、教師のかかわりと環境構成

「やってみよう！」「またやりたい！」という

意欲が湧く、教師のかかわりと環境構成として、次の4つの手立てが考えられる。

- ・友だちのしていることにふれられるようなテーブルの配置にしたり、友だちのしていることをさり気なく認めたりする
- ・子どもが思い切ってやってみたことを認めたり、作ったものをよく見える場所に飾ったり、持ち帰ったりできるようにする
- ・子どもが自分なりに試してみて驚いたこと、不思議に思ったことに対し、耳を傾け共感する
- ・自分で選べるように素材の種類を増やす

3歳児は友だちのしていることを見て、いろいろな方法や遊び方を知り、実際にやってみようとするところがある。そして、おもしろければ、続けてみようとする。事例3①では、友だちのかき混ぜ方にG男が興味をもったため、その混ぜ方を少しの間、見ていたのだと思われる。このように、子どもの中で「やってみよう！」という意欲が湧くようにするためには、まずは友だちのしていることを間近で見て、“面白そう”“そのやり方がいいな”という思いを抱けるようにしていくことが大切になってくるだろう。そうしたうえで、“自分もやってみようかな・・・どうしようかな・・・”などと興味を示していれば、その友だちのしていることを教師がさり気なく認めていくことが必要になってくるだろう。そうすることで、G男のように子どもは迷うことなく、友だちのしていることを取り入れてやってみようとするにつながついていくと考える。

事例2ではD女が思い切って作ってみた泥だんごに対して教師が認めたり、よく見える場所に飾ったり、持ち帰られるようにしたりしたことで、D女の中に達成感や充実感が生まれたのだろう。この達成感や充実感が“またやりたい！”“もっとうちでやってみよう”という意欲につながっていくと考える。こうしたことを積み重ねていくことで、臆することやためらうことなく「もの」にかかわっていき、自分なりに考えて試していくようになるのではないだろうか。

事例3②では、J男にとって自分の驚きや不思議

議に思ったことを聞いている教師の存在が自分なりにやってみることへの活力となっていた。そうした存在がいなければ、子どもによっては自分なりにやってみる、試してみることをやめてしまうことも考えられる。子どもが伝えてくる驚きや不思議に思ったこと、やってみたことに対し、教師がそれらをしっかりと受け入れ、共に驚くことが大事になってくると考えている。

事例③では、教師がお花紙の色の種類を増やし、自分で選んで使える環境を構成することで、疑問が生まれ、J男の中で“やってみたい”“試してみたい”という意欲が湧き、自分なりに考えたことを思い切ってやってみることにつながったと考える。しかし、素材の種類を増やすということについては、むやみに種類を増やせばよいというのではなく、子どもの遊びの様子を教師が把握し、必要に応じながら種類を増やしていくことが大切になってくるだろう。

5 おわりに

教師が講じた手立てによって、3歳児の子どもたちが「もの」と出会う中で抱く“自分にもできるかな？”“さわっても大丈夫かな？”といった不安や戸惑いを乗り越えながら自分の中でやってみたいこと、試してみたいことを思い切ってやってみようとする姿が見られた。そこでは、子どもたちが五感を働かせて感じていたり、自分の思いが実現できたことを喜んだりする姿が見られた。こうした姿を目にして、子どもたちが、まさに「やってみる楽しさ」を実感している姿だと感じた。

子どもたちのこの経験は、幼稚園教育要領「環境」の目標に示されたことにつながっていくとともに、物事にかかわる中で生じた困難や疑問に対し、すぐにあきらめることなく、何度も繰り返し挑戦していく姿勢にもつながっていくと考える。その場合、3歳児の時から子どもたちに「やってみる楽しさ」を実感する経験を積み重ねていくことが大切であると考えられる。

改めて子どもたちが「やってみる楽しさ」を実感することの必要性を感じながら、今回、検討した環境構成と援助が今後の3歳児における保育の中で生かされるものと考えている。これからも子どもたちが「やってみる楽しさ」を実感する保育に取り組んでいきたい。

<引用文献>

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」, p. 120, 2008, フレーベル館.
- 2) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター：「幼児期から児童期への教育」, p. 74, 2005, ひかりのくに.